

日本人大学生の論文・レポート作成における「日本語」教育

三宅 和子

(東洋大学 文学部 日本文学文化学科)

1. 日本人大学生になぜ「日本語」教育が必要か

本稿では<「日本語」教育>を、<日本語を第一言語とする話者が自己の考えや感情を表現するのに必要な「日本語」の教育>という意味で使う。「日本語」の教育という考え方は、従来の学校教育、国語教育では十分に顧みられてこなかった。しかし近年、大学生の言語表現能力の不足が真剣に語られるようになってきている。入学直後の大学生は一般に、自分の使っている言語に関する自覚がきわめて希薄であり、自己の考えや感情を表現する能力を十分に獲得しているとはいえない。多くの大学では、「日本語表現法」など、日本語を第一言語とする学生に対しての言語表現教育科目が設定されるようになってきた。とくに、大学で課されるレポートや論文の作成、口頭発表の技術など大学教育に直接関わることにに関して指導の必要が強く感じられている。さらに、仲間同士やアルバイト、就職のインタビューなどアカデミックな領域以外でのコミュニケーション能力についても、大学が関与する生活環境の重要な側面として何らかの指導が期待されるようになってきた。このような指導の担当には、筆者を含めいわゆる「日本語教育」を担当してきた教師があたるケースが増えている。「日本語教育」の基本的な教育観（「日本語を世界の様々な言語のひとつとして客観的に捉える目をもつこと」、「ことばを使って自己を表現する指導をすること」）は、これまでの大学教育一般に不足していたものである。日本語教師は、言語能力育成に必要なプロセスを分解して考え、指導に応用するといった実践的スタンスで、日本人への「日本語」教育にも効果的な授業展開を期待することができるのではないだろうか。

本稿では、大学生に論文・レポート作成を指導することを目的とした、筆者の担当科目「現代日本語表現」（半年終了科目）の実践を例に、「教育とは何か」という根本的な問題を意識しつつ、大学生の「日本語」教育には何が必要かを考える。

2. 大学生の文章：言語技術的側面

大学に入学したばかりの学生は、日本語あるいは自分の書く文章のスタイルに関してどのような自覚があるのだろうか。日本語について概説する授業の一週目に課題を出した。「三種類以上の辞書をひき、「国語」と「日本語」の項の記述の違い、取扱いの違いを調べ、それぞれの意味の違いを纏める」というものである。この課題の狙いは、「国語」と「日本語」の違いについて気づかせること、この2語の項目の取扱い・記述などが、辞書の刊行年代、編者・出版社の傾向、辞書の対象者の違いなどによって大幅に違うことに気づかせることであった。授業ではまず「国語」と「日本語」の違いについて客観的に定義することが求められた。このような疑問を抱いたことがない学生にとって、思いのほか難しい作業である。

課題を遂行することにより、学生は辞書によってこの2語の記述に違いがあること、全体的に「日本語」の扱いが小さいこと、辞書によっては「日本語」という項目すらないもの、「日本」のサブカテゴリーとしてしか現れないものがあることなどに気づく。そして2語の意味の違いとともに、自分が毎日使っている言葉が社会文化的にどのように扱われ、考えられてきたかを感じ取ることができる。課題とともに課されていたコメント欄には、このような新鮮な気づきや驚きを素直に表現したものが多かった。

但し、このような簡単なコメントを書く作業においても、日本語力の不足を感じさせられる文章が少なからずある。以下は学生のコメントの実例だが、大学生の文章作成にどのような言語的指導が必要かを大まかにつかむことができよう。ただし、これは誤りや問題箇所が例外的に多いものを選んだもので、平均的な学生の文章例ではない。

<学生のコメント例>

国語は特に、日本だけっという感点ではなくて、国の言葉として使用していると思った。国の中で私的なものではなく、公的なものとして。

それに対して、日本語は、国語よりも硬さをなくした感じで日本人同志のやりとりのために使われている言語だと思った。だから、調べた感じ、今まで、日本語と国語の違いなんて、考えてもいなかったけど、調べてみると面白いし、なんでもっと早く、そのことに疑問をもたなかったのだろうと思う。私たちは小さなころから、国語を自然と使っていたから分からなかったのかなぁとも思った。

言語技術という側面からは、誤字、話し言葉と書き言葉の混用、表現の稚拙さ、構成力の不足などがみられる。このような問題はほかの学生にも多かれ少なかれみられ、大学入学までの教育のなかで自己の考えや発見を簡単な文章で公にするという指導がほとんど行われていなかったことが分かる。大学での学習や課題達成にはしかし、そのような基本的能力が必要である。

3. 大学生の文章：考える力

大学生の論文・レポート作成上で、言語技術的側面よりもさらに重要だと思われる問題がある。どのような論文、レポートを書けばよいか、入学当初の学生は見当もつかない状態であるということである。しかもレポートはそのような現状を顧みることなく続々と課されていく。課題のテーマがかなり限定されている場合でも、どのようなアプローチで課題に迫っていくべきか、それまで「自分で考える」ことを免除(剥奪?)されてきた学生には難問である。言語技術的な問題より、実はこちらのほうが根が深い。というのは、2. で述べたような言語技術的な問題に関しては、実際に例を出して指導したり注意を促したりという活動を繰り返せば、日本語を母語とする大学生はかなり向上をみることができる。しかし、課題へのアプローチのし方や思考の組み立て方などは、形式があって簡単に学べるような種類のものではないからである。加えて、様々な専門の教師から出されるレポートの内容は一様ではなく、アプローチのし方を変えなければ遂行できないことが多い。課題にどのようにアプローチするかを学生が判断するのは容易ではない。また、明確な論理展開を要するレポート作成には、発想する力、考察する力などの根本的思考力の教育が必要である。このような力はこれまでの教育において最も不足している部分であり、進歩や向上が一朝一夕に現れるものではない。それだけに問題点を分析し、よりいっそう真剣に取り組む必要がある。

4. 大学生にとってレポート作成はなぜ難しいか

2、3で述べてきた問題点を解決するには、日本人大学生にとってレポート作成という創造的な作業がなぜ難しいかを考えなければならない。以下、技術面、思考面、学習面からその原因を考えてみる。

a. 技術面

学校教育で論理的な文章を構築する指導がなされていない。高校までの国語教育には以下のような問題点があると思われる。

- ・ことばの教育(「表現する」教育)が不足している
- ・自分のことばを客観的に自覚する機会がない
- ・〇×式教育/白黒判断教育がベースにあり、短絡的表現(表現が単語レベル)が横行し、正誤判断に興味集中している

- ・入試小論文（現状ではレポートでも短い「論文」でもない）の弊害があり、論文・レポートの概念が理解されていない。

b. 思考面

現代日本社会に生きる人間一般の問題として、旧来からの世間の枠組（ムラ社会で長年育まれてきた価値観）と、現実生活（欧米的、ポストモダンの価値観）とのずれをどのように再構築していくかが真剣に語られてこなかった。論文・レポートといった欧米的価値観を起源とする思考法が、高校までの教育環境、社会環境では十分に育てられておらず、大学生は思考の軸を定めることが難しい。

c. 学習面

学校という枠組みの中での学生の問題として以下のようなことがいえる。

- ・受動的な学習姿勢（「教えてもらおう」という志向が強い）が「自ら学ぶ」という自然な欲求を阻んでいる
- ・目立つことへの怖れ（自意識が強く、周りを気にする習性）がある
- ・正誤判断を尊重するため、「正しさ」へのこだわり、「間違い」を怖れる意識が強い
- ・プロダクトを重視し、プロセスの重要性への認識が欠如している
- ・課題の遂行にこだわり、課題が出された意味について考えない
- ・群れの中の一人であることに甘んじて、個人として教師や他者と対峙することをしない

これに加え、大学でレポート課題が盛んに出されているにもかかわらず、科目ごとにはレポート作成の指導がない現状がある。また、提出されたレポートに関してコメントが何も出されないことなど、「学習」に基本的に必要とされるインプットやフィードバックが欠如しているため、大学生に気づきや自己修正が起らないといった大学教育自体の問題もある。

5. レポート作成に必要なもの

論文・レポート作成には、少なくとも以下の項目に対して大学生の自覚や認識が必要である。

①誤字	②語彙	③書きことばと話しことばの違い	④構成
⑤研究の手順	⑥発想	⑦考察	⑧推敲
		⑨その他	

これまでに「論文・レポートの書き方」、「日本語表現法」などの類書が出版されているが、それを見ると、上記の全部を過不足なくカバーしているものはないようである。

上記の項目を単純なカテゴリー分けをして考えてみると、①～③は言語技術力中心、⑥～⑧は思考力中心、④～⑤はその両面にわたるといえよう。「論文・レポートの書き方」の類書はこれまで数多く出版されており、その内容は、概ね③、④、⑤、⑧が中心である。いっぽう、近年日本語教師らによって作成されることの多い「日本語表現法」などの類書は、留学生だけでなく、日本語母語話者にも必要になってきた誤字や語彙指導、論理的思考展開の指導にも力を入れており、①～⑤が中心となることが多い。

したがって、①～⑤、⑧の指導に関しては新旧の教科書のかなりの蓄積あり、教室の指導もさほど難しくないと見える。また、学生の意欲さえあればテキストを使って独習することも可能である。しかし、⑥、⑦のような思考力を育成することに関しては、指導が難しい上にテキストとして出版する体裁に整えにくいいためか、この部分を主眼にした指導が不足しているし、テキストや指導書は出版されていない。⑥、⑦で問われているのは、レポートの課題をどのように捉えるか、どのように調査を進めるかなどの「考えるプロセス」である。これは日本人大学生にとってはまったくといていいほど未開拓領域であり、いいレポートを書こ

うとすればするほど戸惑いも多い。したがって、この部分こそがレポート指導の最も重要な点であり、教師の介入が必要とされるところだと考える。

6. 「現代日本語表現」レポート指導の実践例（前期12回）

6-1. 授業の構成

筆者の担当する「現代日本語表現」では、前期にレポート作成を中心にした「書く」ことの指導、後期には口頭発表や面接、インタビュー、電話会話などの「話す」ことの指導に取り組んでいる。2001年前期のレポート指導では、学期末に「若者のことばについて」という課題のレポートを書き上げて提出することを目標にした。論文作成には、これまで述べてきたように、言語技術的な側面と思考プロセスの側面の指導が必要である。今回の実践ではその両面をバランスよく指導できるように留意した。学期の当初ではレポートらしい言語表現やスタイルに重点をおいて指導し、実例を使いながら言語技術に関する自覚を高めた。同時に、学期の始めからレポート作成に関してどのようなステップが必要かを少しずつ考えさせるようにし、思考面の自覚を促すようにした。学期の中頃から言語技術面ではレポート全体の構成、章立てについて考え、思考面では様々な課題のレポートにどのようなアプローチのし方があるか、自分のテーマをどのように設定していくかなどの指導を行った。授業の大まかな構成を以下に示す。

- 1 - 4回目 技術：論文・レポートで使われる表現、使ってはいけない表現
思考：よい論文・レポートに必要なものは？
- 5 - 6回目 技術：参考文献の引用→他人のデータ・意見と自分の意見を明確に区別
思考：レポート課題「若者のことばについて」に、どうアプローチするか
- 7 - 8回目 技術：論文とは・論文の構成
思考：課題へのアプローチの仕方を考える（学生の実例をもとに）
- 9 - 12回目 技術：序論、本論、結びの内容と展開
思考：課題と自分のテーマを結びつける
自分のテーマを追及するために必要なプロセス
課題を書くために必要なデータ集め・調査
レポート全体の構成

6-2. 多人数クラスにおける工夫

「現代日本語表現」が効果的に機能するには、小人数のクラスで、学生とのインターアクションを重視した授業展開が望まれる。学生との対話のなかからこそ、4. で指摘したような問題を突き破る糸口がつかめる。しかし、現状では70-80人の受講生を受け入れざるを得ない。学生とのインターアクションを少しでも増やし、学生の思考プロセス、行き詰まりのポイントなどをつかむために行った工夫を以下に概観する。この指導の下敷きになっている基本的な考え方は、「個々の学生には自ら学ぶ力がある。個別の丹念な指導は実現できないが、教室での実例を使っての説明や、考え方や枠組みのとり方などの指導を参考に、各自が自分の課題とテーマに引きつけて考えることが期待される。言語技術は注意を喚起することで向上を促すことを旨とし、考えるプロセスの指導により多くの力を入れる」というものである。

①ファイルブック提出の義務化

大人数だがインターネット使用環境にない学生もいるという制約から、ファイルブックを各自が購入し教師と学生の間で毎週何らかの情報が往復するようにした。

②学生は毎週ファイルに作業結果と質問・問題点を入れて提出

これを義務化することにより、それぞれの学生がどのようなプロセスにいるか、どのような問題にぶつかっているかが分かる。

③個別指導ではなく、ヒントをもらって自ら学ぶ

教師は毎週学生のファイルを概観することにより、学生全体に関連のある問題や躓きやすい点などを大まかにつかむことができる。学生に必要な情報や認識が必要な点をリストアップしておき、次週の授業中に説明する。その時点で個別指摘がぜひ必要と判断したもののみ、個々のファイルにコメントを添えて返すこととした。これは充分満足できる量と質とはいえないが、多人数を相手とする指導では教師の時間の制約からこのような妥協案を考えることも必要になる。また、教師が手取り足取り教えるのではなく、大学生の自ら学ぶ力を最大限に引き出すことも教育として重要であると考えている。

④返されたファイルと授業中の指摘から学ぶ

学生は授業中の教師のコメントを聞き、返された自分のファイルを見て、自分のレポートは教師のコメントにある事柄に該当するかどうかを自ら考え、次回のステップの参考にする。

⑤言語技術より思考プロセスの向上

良質の「レポートを書く」ということは、どのように書くかという技術面よりも、どのような問題意識を持ち、どのように問題にアプローチしていくかを考えることのほうが大切であることに気づく。

7. 評価の基準と今後の課題

提出されたレポートの評価は言語技術面よりも思考プロセスを重要視し、以下のような基準で行っている。

①章立てを行い、全体の構成が明確に把握できているか

章立てをすることはたいへん重要である。論理的な文章を書き慣れていない大学生は、はじめに設定した問題提起の議論から途中で外れていくことが多々ある。章立てをすることによって、たえず当初の予定を確認しながら論を進めることができる。

②論理展開に無理はないか

これは①とも関連するが、大学生には文を積み重ねて論理を展開させるという経験が不足している。章立てをした後、そこで述べることを箇条書きなどして書き出しておくことが大切である。論理展開がスムーズでないもの、別な話題にずれていくものなどが多く、箇条書きを確認しながら書き進めるとある程度防げる。論理展開がどのようになされるべきかを考える訓練も必要である。

③オリジナリティーがあるか

与えられた課題やテーマを自分に引きつけて論じることは意外に難しい。資料を集めて読んでいくうちに、その資料の主張そのものを書き写す結果になっていることが多い。

④資料を調べているか、またその引用の仕方は適切か

レポートは自分の感想や(根拠のない)単なる意見とは違うを自覚することも大切である。資料のないレポートは感想文と変わらなくなることを学ばなければならない。またその資料や参考文献を引用する場合には、何をどのように引用したかが明確に分かるように提示すべきことにも注意を向ける必要がある。

⑤事実と意見、感想の区別ができていないか

これは④との関連が強いが、事実と意見を区別して考えることができない学生は多い。また、感想と(根拠のある)意見との違いにも意識が向いていない。このような差異が分からないレポートは、感覚的に優れた指摘があるとしても、大学のレポートとしては問題がある。

⑥誤字、不適切な表現はないか

誤字や不適切な表現については、たえず授業中などに指摘する必要がある。レポート作成段階でもあやふやな語は辞書で確かめる習慣をつける必要がある。不適切な表現については、専門の文献をはじめ量を読ま

ないと改善しないかもしれない。しかし、少なくともレポート完成時にもう一度チェックし、ケアレスな間違いがないようする必要がある。

なお、授業中、学生側から出た疑問・質問の一部を以下にあげる。一見ナイーブともいえるが、真剣に考えれば実はひとつひとつが難問であるように思われる。今後研鑽を積んで、このような問いにも紋切り型ではない答えかけができるような指導に努めたい。

- ・どのようなことばが話しことばなのか、話しことばで書いてはいけないのか
- ・論文調でなければだめか→高校の先生が話しことば的レポートは個性的でいいといった
- ・段落から段落へはどうつなげればいいのか
- ・章と章はどのように分け、どのように変わり目をつなげればいいのか
- ・どんな資料を探せばいいか、調べ方が分からない
- ・どう課題にアプローチしていいか分からない

また、指導後のレポートにおいても、以下のような問題の改善を必要としていることが実感された。

- ・論理の飛躍になかなか気づかない
- ・インターネットの情報と学術情報の信頼性と価値の違いが分からない
- ・事実と意見・感想の違いが分からない
- ・芋づる式に調べていく意欲・能力の欠如
- ・大きなテーマと小さなテーマの区別が分からない
- ・分野や指導の教師によって、いわれることが違う
- ・多数のいいかげんな態度の学生と、少数の非常に真剣な学生がいる

学生のレポート作成力を向上させるにはさらに、大学生にどのようなレポートが課されているかの調査、どのようなところで難しさや行き詰まりを感じるかの調査などを実施し、実態をさらに明らかにすることによって指導の方策を練る必要がある。

本稿は日本人大学生に対して行っている「日本語」の教育に関してであったが、大学の教育全体に関連するものを多々含んでいる。また母語話者だけではなく、非母語話者に対する「日本語教育」においても今後考慮すべきことが示唆されていると思う。日本の大学で学ぶ留学生に対するこれまでの「日本語教育」は言語技術面の指導を中心としていたが、留学生数が増加し留学目的も多様化している現在、本稿で考えた思考プロセスの指導も実は必要になってきているのではないだろうか。

今後は、同じような科目を抱えている日本語教師との協力を通して、日本人大学生に必要な言語表現能力の開発を続け実践記録を公開するなど、自他ともに学べる体制ができるように努力したい。また、今回は紙幅の制限で言及できなかったが、口頭表現能力に関しても考察を進めている。

授業を通して学生から学ぶことも多い。教師と大学生の双方向の学びが、このような授業を効果的にしていくためには最重要要素なのかも知れない。

なお当授業では、テキストとして『大学生と留学生のための論文ワークブック』（浜田麻里ほか 1997 くろしお出版）、引用テキストとして『レポートの組み立て方』（木下是雄 1994 ちくま学芸文庫）を使用している。

*本稿は、2001年7月28日早稲田大学で開催された第8回「国語と日本語の連携を考える会」での口頭発表に加筆改編したものである。